みやぎ教育文化研究センター

センターつうしん

NO.63

震災特集

目次

ひと言

Ⅰ 会員のあの日・あの日から・そして今　2　1

佐々原和子　勝然たみ子　内海　正之　菊池　英行　山口　正富
中野　典子　清水　仁　小野寺修子　渡部やす子　松浦　泰二
高橋　幸子　A・T　掛川　恵一　富樫　昌良　皆川　秀雄
佐々木俊幸　小出　信也　田中　武雄　三浦　恭夫　斎川　勝利
鈴木　正　前野　忠夫　菅井　仁　清岡　修

Ⅱ 子どもたちの「あの日」と「それから」　24

下山みすず　林　弘　佐々木楽人

Ⅲ 「あの日のこと」―亘理・荒浜小学校の話を聞く　27

題字：江島隆二　写真：千葉保夫・中寛・清岡修

ひと言

3・11を言葉として残したい

春日　辰夫（センター所長）

海沿いの被災地を歩くごとに、「自分が変わる」ような気がした。

呆然と立ち尽くしながら、20年前、生活科の教科書づくりで「自然に対する怖れ」のページをつくることについての議論の場が浮かんきた。

長時間を費やした末、「これからの人に『自然の大きさ』を感じてほしい。『自然の大きさ』を知っている人が、『人間の大きさ』を、『暮らしの尊さ』を、『社会の大切さ』を知るはずだ」とまとめ、教科書の文は、

「（荒れ狂う冬の海のモノクロ写真）　しかし、／たろうをふるえさせたのは、／さむさではなかった。／あいいろのうみが／白いなみをあげて／さけぶうみだった。／ふりしきるゆきは、／うみにふれると／きえていく。／なにか見えない／大きなものが、／うみのむこうにいるように、／たろうにはおもえた。」におちついた。

もちろん、この文の読解ではない。教師それぞれの方法で「自然の大きさ」を考え合ってほしいとの願いだ。（＊この教科書はほとんど関心を持たれることなく既に今姿はない）。

今号の震災特集は会員の方に、非情なお願いをして編んだ。なんとしても言葉で交換し合い、言葉として残したかった。それがセンターの大事な仕事との思い込みだ。

ひと言加えれば、3・11は現在の教育への強い問題提起と私は受けとめている。

II　子どもたちの「あの日」と「あの日から」

鎌田先生へ

下　山　みすず

私はあの恐ろしいことが起きていなかったとしたら、今頃、楽しい中学校生活を過ごしているところです。

3月11日午後2時46分、あの恐ろしい大震災が起こりました。私は今でもあの時のことをはっきりと覚えています。あの寒い雪の中、ジャンパーを着ていない生徒もいて、その中、大きな音のサイレンも鳴り響き、恐怖の時間でした。日和山に避難するとき、先生は、着の身着のまま避難して来たにもかかわらず、近くにいたおばあさんの心配をして、頭にはようしゃなく雪がふりかかり、それにもかかわらず、時々声をかけながら歩く先生を見て、私は、（先生みたいな大人になれたらいいなあ）と思いました。

それからの先生もすごくテキパキ動いて、門小生を落ちつかせているのを見て、（ああ、カッコイイなあ）と思いました。すると、お父さんが来てくれたので、もう私は涙がとまらず、泣きじゃくってしまいました。家族の無事を聞き、ホッとしてまもなく、あの大津波が私たち自慢の町、門脇と南浜を襲いかかりました。すると、「キャー私の家が！」「どうか私の家に水が入らないで！」と願う子たちを見て、かわいそうになってきました。私はただただ「大丈夫、心配ないよ」と言うしかありませんでした。「バキバキ！　ゴオー！」というものすごい音も聞こえてきて、（この世の終わりだ）と思いました。すると教頭先生が、「もっと上に上がれ――！！」と門小生に呼びかけて、そして叫び、門小生はもっと上に避難しました。それが正しいはんだんでした。なぜなら、下級生が津波をほとんど見ていないんです。それは、正しいはんだんでした。それからお父さんと巧と帰る途中、ふなき先生が涙目で来て、「学校、もえているんですー。どうすればいいんでしょう」と言ってきました。それを聞いた私は、自分の物がすべてもえていると悲しくなりました。その日の夜、おばあさんたちが、私の寒い家にとまりました。おじいさんの車のナビでじょうきょうを見ると、むざんなこうけいでした。てい電、断水ときて、私は思わず、（生きれるかなあ）と心配になりました。私は、もろに津波を見てしまったので、目をつむると、そのこうけいが出てきてねむることができぬまま3日が すぎ、家族みんなは湊にすむおばあさんとおじさんの心配をはじめました。

今は、おばあさんとおじさんは、私の家にすんでいま

す。私は、あるテレビ番組で、こんな言葉を聞きました。「こういう大災害を乗りこえられる人にしかこんなことはおきない」。私はこの言葉を聞いて、ハッとさせられました。私たちは、この大震災をのりこえられると想い、神様がこのようなことをしたのだととらえます。６の２をはなれていく友だち、亡くなってしまった子もいるけれど、私たちは、これをのりこえて生きていくべきです。

みんなで力を合わせて、母校をふっかつさせましょう。

がんばろう６の２！

がんばろう６年！

がんばろう門小！

がんばろう石巻！

がんばろう東松島！

がんばろう宮城！

鎌田先生、むりをせず、これからもがんばってください！

鎌田先生・６年生のみなさん

林　弘

卒業式おめでとうございます。ぼくはひと足先に、３月24日、Ａ市立Ｓ小学校の卒業式に参加しました。たった３日間だけ通った学校で出ることはとてもなやみました。どうしても門脇小のみんなと一緒に卒業式をやりたいと思っていたからです。でも、Ｓ小のクラスの友だちがぼくをあたたかくむかえてくれたり、先生方からも「小学校６年間をがんばったあかしとしてでも一緒に卒業式をやろう」と話してくれたり、何よりも、たった３日間だけで、仲よくなったクラスみんなに「一緒に卒業しよう」と声をかけられ、参加することにしました。

卒業証書をもらった時は、やっぱりうれしかったです。それでも、ぼくの小学校の思い出は門小にたくさんつまっています。みんなと一緒に笑ったこと、がんばったこと、時にはけんかをしたり泣いたこともあったけど、全部がぼくの大切な思い出です。

震災の時、こわくて、ふるえが止まらなかったぼくに、「だいじょうぶだよ」と声をかけてくれた友だち。雪の中、津波からにげている時、寒いからと言って、自分のコートをぬいでぼくに着せてくれた友だちのおばさん。ひ難所で少ない食べ物を分け合った仲間。

こんなみんなと、きちんとお別れができないままＡ市に来てしまったことは残念に思います。

震災は、本当に恐ろしいものです。でも、震災は、ぼくに教えてくれたものがあります。それは、今まであたりまえのように普通に生活していたことが、どんなにめぐまれていたことだったのかということです。何もかもなくなって初めて気付きました。

今日もぼくは、ピカピカの制服を着て、学校に通うことができます。家に帰れば、あったかいごはんがあり、お風呂があり、布団でねることができます。これは、本当に幸せなことなんだなあと強く思います。

今の僕に何ができるのか、はっきりとわからないけれど、助かった自分の命を大切にし、精いっぱい生きていくことだと思ってます。そして、今のこの気持ちを絶対に忘れてはいけないとも思います。まわりで、支えてくれるたくさんの人たちに感謝の気持ちをもって、これか

らも一生けん命がんばります。
みなさんも元気でがんばってください。必ずまた会いましょう。
卒業証書は、ぼくが自分で受け取りに行きます。

平成23年4月15日

街の姿　人々の声

佐々木　楽　人

3月11日は卒業式でした。お世話になった部活の先輩と別れを惜しみ、自宅に戻りホッとした瞬間に、あの信じられない地震が襲ってきたのです。父も祖父のいないことが、とても不安だったことだけを覚えています。後はあまり記憶がありません。

自宅は塩釜市の高台にあるので、津波の被害は受けませんでした。食料の買い出しをするため、スーパーの前に並んでいました。ヘリコプターが飛び、緊急車両が行き交う街は、普段とは違う様子でした。並んでいる人たちとは気軽に話ができました。あの恐怖の時間を過ごしたという共通点があったからだと思います。

『今日は（3月13日）はお父さんとお母さんの結婚記念日だよ。』と言うと、並んでいた人たちが『おめでとうございます。』と拍手をしてくれました。

塩釜の海沿いは、街の姿を変えていました。商店街は破壊され、船が陸地に打ち上げられていました。かまぼこやさんは、店の内部がすべて津波で流されてしまいました。そんな中かたづけをしている人から、笑い声が聞こえてきたのです。こんな時でも、笑いながら元気を出している人がいると思うと、何とも言えない不思議な気持ちになりました。

先日、父と南三陸町に行ってきました。志津川中学校から街を見たとき、街の姿がそこには全くありませんでした。せまりくる津波から必死に逃げようとした人々の姿を思うと、ことばに表せないほどの衝撃を受けました。そして、人々の声も聞こえてきませんでした。ただ黙々と作業をしている、大型機械の音だけが響いていました。

歌津方面に向うと、『営業中』の看板を出しているガソリンスタンドがありました。店は鉄骨のみが残っている状態でした。

『トイレを貸してください。』
『はいどうぞ。』
『ありがとうございました。』
『またどうぞ。』

とても元気のいい声が返ってきました。仕事ができる喜びを体全身で表しているように思いました。その声は、何もない街に大きく響いているように感じました。

街の姿は、時間はかかりますが少しずつ復旧していくと思います。そのためにも、人々の声が街を元気づけ、一人ひとりが復興していかなくてはいけないと思います。

ぼくは、そのためにも今できることをしっかりやっていきたいと思います。

（中学三年生）

Ⅲ　あの日のこと

―亘理・荒浜小学校の話を聞く

4月26日午後、「あの日」のことをお聞きするために、亘理・荒浜小を訪ねました。今、荒浜小は校舎が使えず、隣の逢隈小学校を借りていました。特別教室が職員室になり、その一角の校長室で、あらかじめお願いしてあった、中寛先生と渡辺隆先生のお話を伺いました。以下は、その時のお話のテープをもとにまとめたものです。紙数の関係で後半部は略させていただきました。文責はすべて研究センターにあります。

大津波警報

私は、特別支援担当であり、この学校の中では一番長くいる方で、わりと動ける立場にいました。放送で地震について気をつけるようにとの話があり、すぐ下に降りて確認したら、大津波警報が出ていました。最初は3メートルぐらいだったような気がしますが、だんだん6メートル、7メートルという話になってきたのです。

3、4年ぐらい前に宮城県沖地震の訓練をしていました。地域住民も含めたものでした。それは、津波を想定して3階に児童、2階に地域住民という形で避難する訓練でした。普通だと建物が壊れる心配があると校庭避難だと思いますが、その時の経験で、地域住民の方が逃げてくるということがわかっており、地域住民がどんどん来はじめて、とりあえずの校庭避難は無理ですと話をしました。

津波が来るという情報が入ったと同時に、まずは、各教室に連絡しました。

子どもたちは余震がありましたが校舎内（自分の教室）待機ということになり、したがって、1、2、3年生は2階に待機でした。

保護者が迎えに

地域住民の方が続々車で来て、特別支援教室（2階に2教室）、社会科の資料室（2階）、理科・音楽室（3階）など特別教室に避難してもらいました。保護者の方たちへの引き渡し訓練をしていたので、保護者が迎えに来ました。しかし、学校としては「津波警報が出ているので学校としては渡せない。危険なので預かります」という対応をしました。それでも、5名の保護者が「引き取って帰る」ということで、学校では止めたのですが、それでも子どもを連れて帰りました。他の子どもたちはそのまま学校にとどまりました。

私の知っている範囲では、迎えに来た1年生のお母さんが「わかった。子どもは安全だから」と家に帰られ行方不明になったということもありました。その子に関して言えば、残念ながら本人以外の家族全員が亡くなられて震災孤児になってしまいました。松江の母方のおじいさんの方に引き取られ、現在は、向こうで学校生活をしていると聞いています。もう一人、母子家庭のお母さんが行方不明になっています。

学校は避難所

当時在籍児童数は２２４名。避難住民は６００名以上でした。学校のなかは、８５０名を越えていたと思います。後から聞いた話ですが、体育館の方に逃げ込み、そこに屋根裏のようなところがあるのですが、以前講師をしていた近所の先生がそれを知っていたので上を開けて逃げたということもあったようです。体育館の舞台ぐらいまで水が来

たようでした。

阿武隈川の河口の水が引いたのがわかったので、津波の来ることがわかりました。地震後30分ぐらい電気がついていたので、それまでテレビで情報は入れていました。津波が志津川の方で押し寄せてきているというところまでは記憶としていますから、そのへんまでで停電したと思います。

3階から川の水が引いたのが見えたので、これは来るぞということで、最悪を想定して屋上に上げるということになりました。最初は屋上の鍵を開けることからはじめて、屋上に最終的に逃げられるようにしておいて、児童優先を住民の方に理解してもらって、子どもたちを屋上に上げて、そのあと住民の方という形で上がった。津波の1波は、避難している途中に来たと思います。私は、堤防を越えてくるところは見ました。

津波の第1波では、先ず川が逆流しました。川だけがどんどん、どんどん逆流して、水かさが見る見る上がってきました。それは、屋上に避難しているとき子どもたちも見ています。溢れている間に、防波堤にどんどん津波があたって水しぶきが見えました。それが、こちらの荒浜の方から南の山元町の方まで行くのが見えます。最初、水はスッと来ました。ソロソロソロソロっていう感じですね。そしてその後、ドッとものと一緒に流れてきたのです。

孤立状態になる

担任の先生たちには、津波が来ることは伝えました。最終的には、児童を屋上に優先的に上げるということで、2階の下学年の子どもたちから上げ、その後住民を屋上まで上げました。時間的には、地震後50分前後だったと思います。

津波が来て、堤防は3年ぐらい前に高くしたばっかりだったんですが、その手すりまで水が溢れてくるのが見えたので、これはかなり大きな津波だとわかりました。私は屋上から見ましたが、子どもたちにはなるべく見せないようにしました。先生方も見てないようです。ユーチューブには、たぶん住民の方が撮ったものだと思いますが、荒浜小から撮った動画がありましたが、あれは津波の第1波だと思います。

校庭には、津波がおしよせて、海側の住宅の瓦礫が避難してきた住民の車と一緒に西側のネットに引っかかるようにぐちゃぐちゃになりました。すごい瓦礫でした。津波は、2波、3波と来たんだと思いますが、私たちは見ていません。駐車場に置いてあった自分たちの車も流されました。まわりが水没して、お城の堀のようになってしまい、完全に孤立状態でした。

学校のまわりは水浸しという状況。中学校は1階上までで、金庫まで流されたという話でした。うちの方は、卒業証書含めて金庫の上の方に置いておいたので、重要なものは大丈夫でした。

避難所の夜

話が前後しますが、停電した段階で、校長が出したんだと思うんですが、養護教諭とかで上に上げているタンクの水を汲んだり、体育館の備蓄庫から濡れていない毛布を持ってきたりしました。出せるだけ水は全部貯めました。食糧の備蓄は、学校にはありませんでした。

水は、最初バケツに汲みました。学校の水は、タンクにありますから。そのタンクの水がなくなってしまえば終わりですよね。モーターも止まってますので、とりあえず出せるだけ出そうということで。2階、3階にいた人に声をかけて、ありったけのバケツに水を入れて、下の7学年組いわゆる職員室組の先生たちで飲料水用のなかに入れたんですね。

それからカーテン、ともかく毛布だけでは足りないだろうということでカーテンがいっぱいあったので、それをはずしてどん

どん運びました。

孤立した状態だったので、夜は理科室のロウソクとか、懐中電灯と電池を集めて、私は1年生で使う防犯ブザーの単4電池とか、自分の持っている懐中電灯を使いました。

子どもたちは自分の教室で、下学年は2人に毛布1枚ぐらいですかね。避難してきた児童館（学童保育）の先生たちやお母さん方もいたので、そういう大人の人たちと一緒に1年生は夜を過ごしました。地震をちょっと怖がったりしましたが、夜もなんとか寝ていました。2、3年生でも怖がったりしたという話は聞きました。全体としては、子どもたちは落ち着いていたと思います。大人の人もいたということもあり、パニックになるというようなことは一切なかったと思います。担任も必ず教室にいたので、わりと落ち着いた感じでした。

子どもたちには津波の様子を直接見せたりということはなかったので、子どもたちは、あまりわからなかったと思います。家に帰れないということで泣く子が出るということもありませんでした。子どもたちは、トイレに行く以外は教室から出ることはありませんでした。

2階には全校が集まれるぐらいのホールと言っている部屋があります。そこには、養護教諭とか看護士さんを呼びました。というのは避難してきた方の中には、重傷を負っている方、骨折されている方とか、出血している方とか、意識朦朧としている方などもいました。濡れている方には我々が持っている衣類なども提供しました。着換えをしないと身体が冷えます。もう意識がはっきりしてない状態で「痛い、痛い」「苦しい」と呻くような状態の人もいて、経験したことはありませんが〝野戦病院〟のような状況が2階のホールにはありました。集められるだけの毛布とかを使ってできるだけの手当をしたり、身体の冷えている人を暖めるなどをつづけました。養護教諭は大変だったと思います。子どもたちの方は比較的落ち着いてその夜は過ごしました。水だけは確保して、トイレ前にロウソクを立ててという形だった。先生方のなかには懐中電灯を持っている方もいるのでということで、一晩すごしました。

うちの学校は道路から1メートルぐらい高いところにあります。昔、年貢を阿武隈川沿いに集めるための蔵があったところなのです。校舎の方は、70センチくらいの浸水ですみました。

1階は職員室、放送室、保健室、家庭科室、図書室が浸水し泥だらけになりました。避難してきた方の犬、ペットも、廊下にいる状況でした。

外部との連絡

住民の方のいるところはとにかく寒く、廊下はかなり寒かった。逆に、子どもたちのいる部屋は子どもたちでほんわり暖かい感じでした。使っていない教室とか特別教室は本当に寒かったと思うので、カーテンを巻いたりとか、釣りクラブの救命道具を着たりとかして、からだを冷やさないように工夫しました。窓に段ボール張ったりもしました。荒浜支所の方や消防署の方がたまたま避難していたのも助けになりました。

3階の配膳室を本部にしました。外部との連絡が取れなくて、緊急電話はちょうど工事していて間に合わなかったし、職員室は水没しているし。ラジオで情報を得ることはできましたが、こちらから伝えることはできませんでした。（荒浜は壊滅して、荒浜小校舎が流されたとかいう話があったり、家族とかも、みんなもうダメだと思っていたような話は後から聞きました）。

たまたま東北放送のラジオに、教務主任がメールでなんとか送ったんですよね。それで、初めて小学校が孤立しているというのが放送で流れました。それが最初だと思います。仙台地区の荒浜の方が２００人から３００人の遺体がという情報が流れたので、地名が一緒なので職員の家族などはダメかと思ったようです。その後、なんとか町とも連絡が取れるようになりました。

おにぎりが届く

翌日10時ごろ、堤防沿いに歩い

てきた救援隊がおにぎりとかを持ってきてくれました。その前に、朝お菓子を二人で一つという感じでいただいて、甘いものを口にできました。かろうじて体育館側から堤防に出るところは水が引いていました。それで、物資が運べ届いたのです。それで10時過ぎにおにぎりをみんな食べられました。そこには、中学校とか支所の分もあったんですが、そちらには水浸しで行けないという状況でした。消防署の方でも無線で連絡をとっていたようで、もう1回津波が来るような場合は、最悪の場合2階の子どもたちも3階なり屋上に上げることはあるという話があったので、子どもたちは寝ましたが、私たちは眠れませんでした。そういうことがあった場合は、すぐに上に上げるという体制はとっていたのです。

逢隈小学校への移動

話を戻すと、おにぎりを食べてから逢隈小学校に避難してきました。逢隈小学校には何もないので、今使っている毛布だけは持って行けということで、要するに毛布だけ1年生も抱えて、土手づたいに出て、亘理大橋の先まで歩きました。町のさざんか号という10人乗りぐらいのちっちゃなバスでピストン輸送して逢隈まで運んでくれるというのです。1年生を先頭に歩いて堤防に出てから橋まで来ました。

堤防もズタズタになっていました。舗装されたアスファルトがバアッと流されている状況でした。橋の上とかにも車のある状態で、そこから荒浜の方に道があるんですが、田んぼにも車が落ちていてかなりひどかったんだなとわかりました。

その時も、川の水が引いたりすることもあったので、また津波が来たら飲まれちゃうなと、たいへん怖い感じでした。我々教員もそのことに一番神経を使いました。子どもたちは逢隈に向かって歩いているし、このときに津波が来たらどうしよう……と。

先頭を年寄りが歩いて、両脚が不自由とか足が折れてるとかという人は板に乗せたりして運びました。養護教諭がついて歩いたんですが、最終的には重くてヘリで重傷者は病院に運んだということでした。

子どもたちは、ここ（2次避難所の逢隈小学校）に来て、教室に入って構わないということでしたので、教室を割り当てて子どもたちを入れました。

それから家族と一緒に東校舎の2階、3階、それから向こうの西校舎を使わせてもらうことになりました。家族と一緒にいる子もいましたが、家族がまだ来ていない子は担任などがついていました。

安否の確認

保護者への引き渡し、先に逃げた5人を含めるとの安否確認は最終的には1週間くらいかかりました。当日の欠席者と、引き取っていった子どもの安否確認がかなり大変でした。

でも、他の学校に比べるとまだ早かったかもしれません。保護者の方は、教育委員会に聞いたりして、ここにいることがわかって引き取りに来ました。家族と一緒に避難している方は、そのまま避難所で生活することになりました。家を流されてしまったという教員もいたし、車は全員流されてしまった。

それで、2、3日の間はここ逢隈小に泊まって引き渡しや安否確認を電話などでつづけました。一番大変だったのは、先ほど言った引き取っていった方や欠席の子の連絡、携帯も一週間以上通じなかったので、その安否確認の作業は非常に大変でした。

安否確認の多くは、非常の時の携帯電話がつながって連絡がつきます。あとは、地区で「あのうちはあそこにいるよ」みたいな話（情報）から連絡がついたり、または、そういう話が相手に伝わって向こうからかけてくるとか、いろいろなケースがありました。携帯電話の番号のわからない家庭は、その家庭と仲のよい親を捜してそこから安否を確認するという、親の横のネットワークによってかなり確認できました。

おじいちゃんを亡くしたなど、家族を失った子どもの家庭はあります。家族全員亡くした子が一人いました。

津波情報と避難のこと

津波についての情報は、地震後テレビをすぐつけたので大津波警報が出ていると知りました。通常だと、あとは校庭にある防災無線で聴くことができます。当日も、防災無線は聴こえていたのですが、普通の状態で聞けるような心理状態ではありませんでした。

「津波警報が出ています」というのはわかったけれども、それが何メートルとかそういうのはわかりませんでした。ですからテレビはずいぶん助かりました。ワンセグで見られました。学校にも直接受信する無線は付けてあったのでその防災無線は入っていると思います。ただ、電気が切れればそれも終わり。30分ぐらいはたぶん入っていたのだと思いますが。

消防団、消防署は「避難するように」と言って回っていたと思います。それで避難して来た住民の方もいっぱいいると思います。学校では一番確実なのはテレビだと思いますけど。電気が切れたあとはラジオでした。

避難してきた人たちは、最初あまり地区関係なく入りました。あとから分けて、要するに学校再開することも含めて、4月9日に体育館の方に集約して、学校にお子さんのいない方は他の亘理高校とか亘理中に移ってもらったりしました。

ここで荒浜小学校が再開するので、荒浜小に子どものいる家庭は体育館に集まりました。逃げてきた時はごちゃごちゃでした。

5丁目の人はこの部屋、2丁目はここ、子どもだけはここの部屋としたのは避難してきて1週間から10日ぐらい経ってからでしょうか、はっきりしないけど。ただ、完全に地区ごとにはなっていませんでした。だから、来た方に聞かれても名簿見てくださいと応えるような状況でした。

実は荒浜は、あまり津波の経験がないのです。

年とった方も津波の被害を受けたという経験がないのです。

1年前の2月か3月に津波警報が出たんですね。その時にやっぱり避難してきた方いたみたいなんですが全然津波が来なかったので、逆によくなかったということはあるかもしれない、という話をしたことがあります。

避難計画に基づく避難訓練を地域住民と一緒にやったのは8年間いる私の記憶では1回だけでした。